

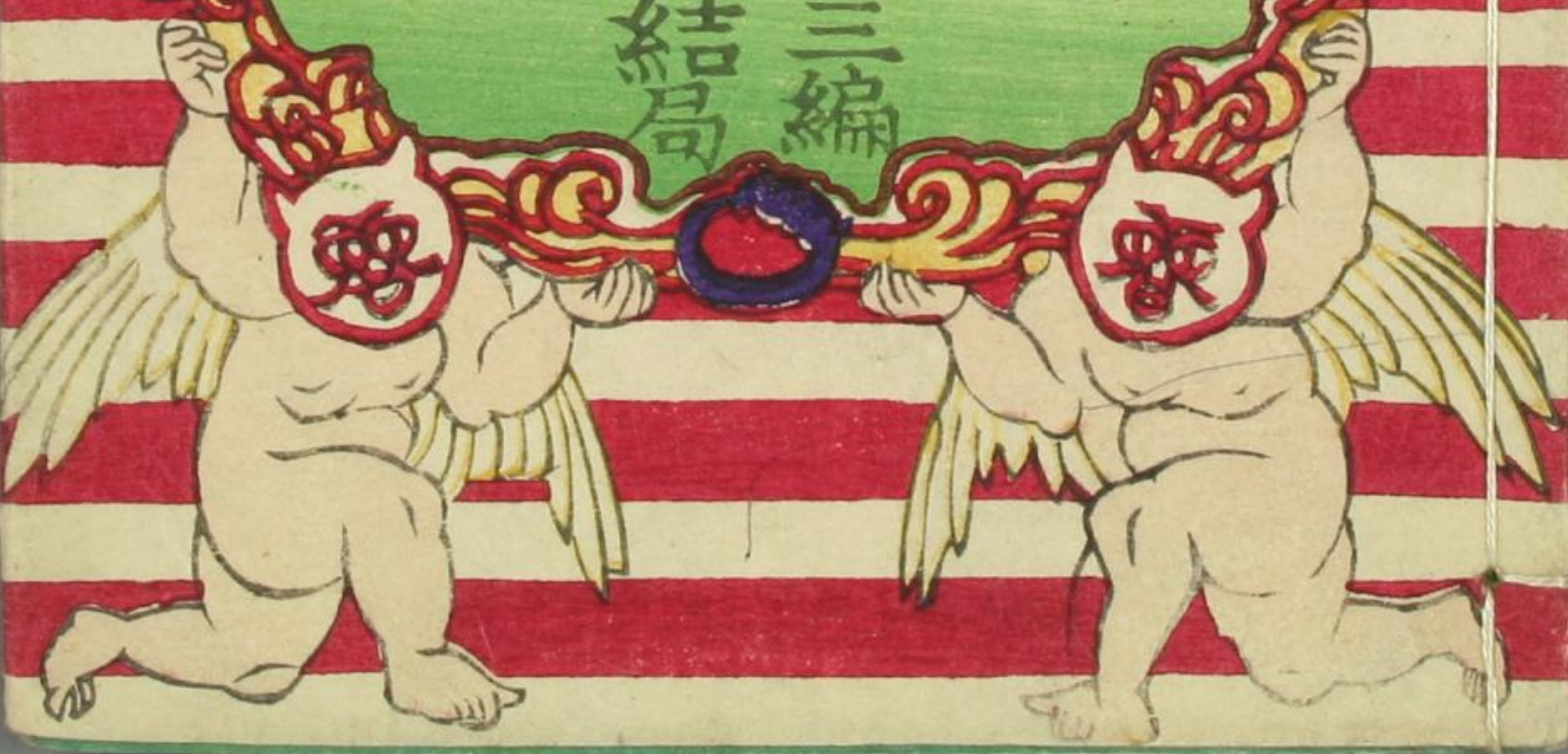
格蘭氏傳倭文賞

ぐらんどうーでんやまごんしや

假名垣魯文和解  
梅堂國政畫

辻岡屋文助梓

結局 三編





梓元 横山町三丁目  
辻岡屋文助

假名垣魯文和解

上

48-8006



下

三編  
國政画

格 藤 氏 傳 倭 友 貴

中



香澤  
明治元年  
一月廿七

金松書房の丁稚  
拂曉は草廬を敲  
いて三編の稿を  
促す其辞を激し余  
いそぐ丁稚知らざりや今日のは  
日曜日はあると偶々の休暇一日の手を  
憩いしめよと丁稚憤然として膝を  
進め先生が日曜の休暇と得  
ざるは平常充日と闕所なるの故  
あり違約のつたう其期を待たし迅速  
筆を採まよと此言大ひ小理由なりと黙々  
机の上は對するの他事あり



各南朝三上



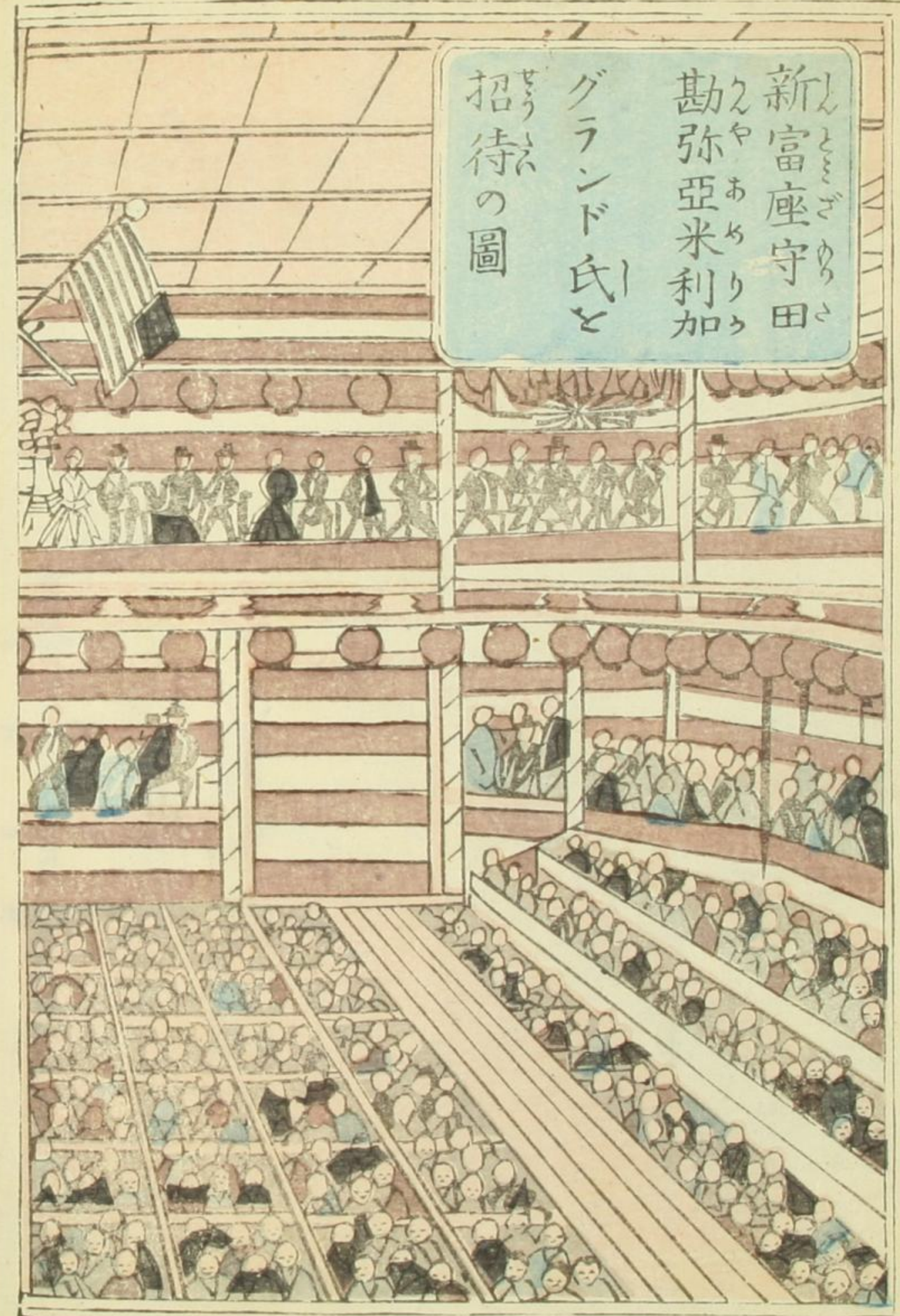
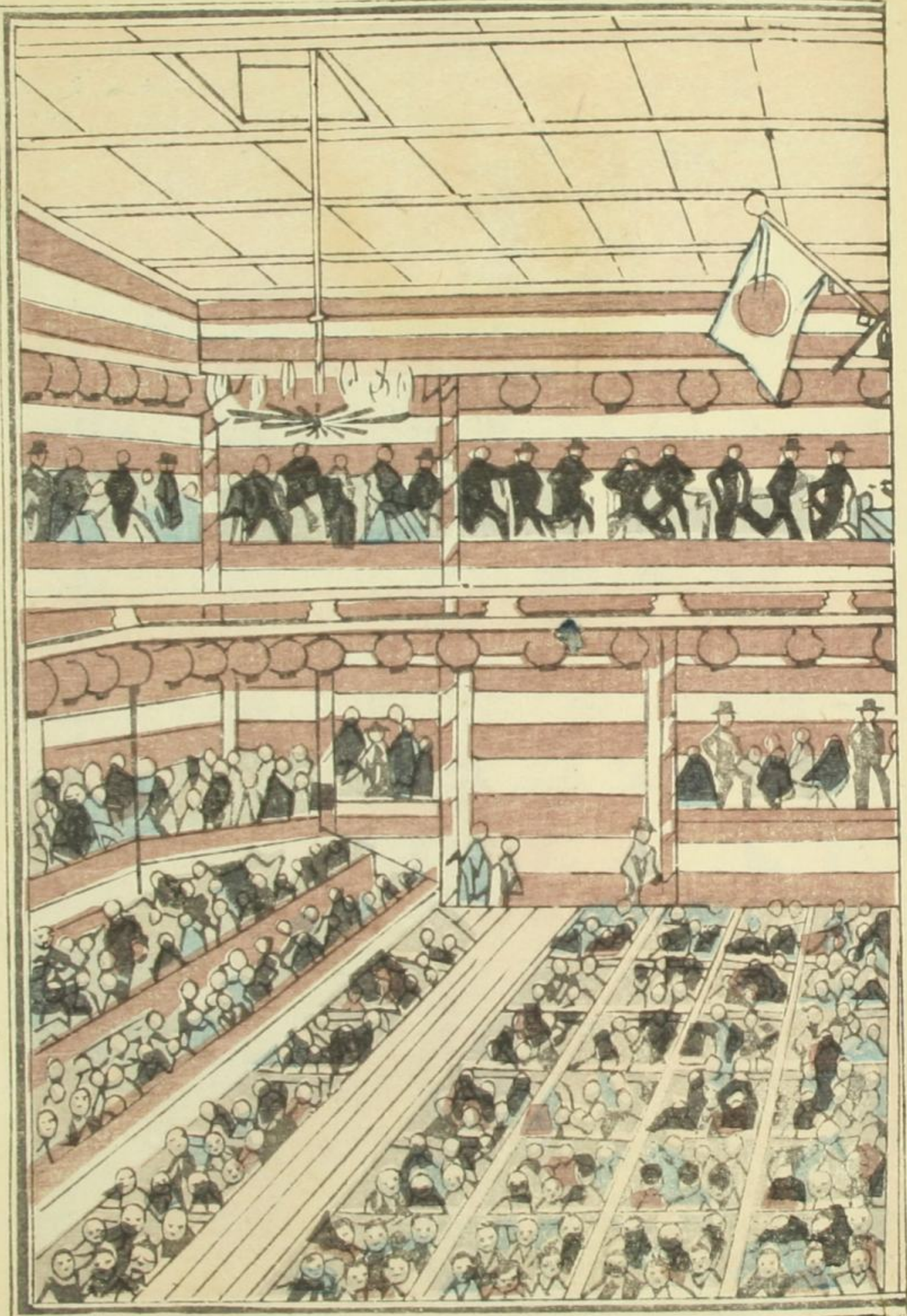
格蘭氏傳  
倭文賞

二編  
上卷

假名垣  
魯文和解

梅堂  
國政函

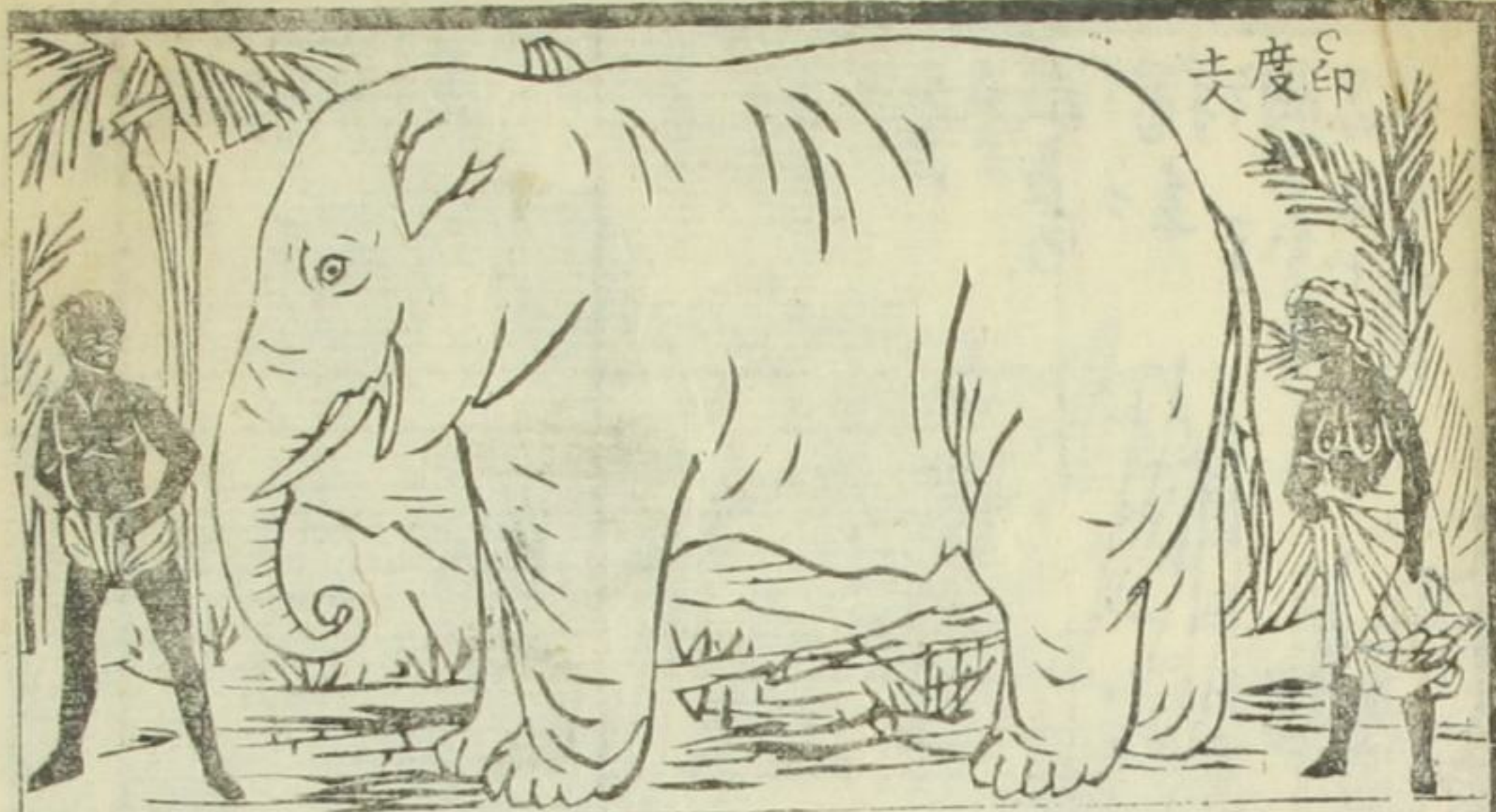
金松堂  
壽輝



新富座守田  
 勘弥亞米利加  
 グランド氏と  
 招待の圖

各座前  
 三  
 五

新富座  
 二



印度

各書三二

格蘭氏傳倭文賞三編上之卷  
 東京 假名垣魯文和解  
 印度ハ亜細亞大洲の南の極の極稱小一と  
 支那と西藏國の西南より海中不突出也  
 するニツの地方といふその全地を茶後小  
 ち大海に沿ひたる地を後行名と号け  
 大陸よなびる地を茶印名又天竺と号  
 一その地の際むね熱帯中なるより早  
 氣候ハ熱く土修ハあぶらく又穀也より不  
 産物多く少於ハ世界の爲中と聞えたる  
 ヒマラマ山の脈と有るハ大小の江河その源を  
 此地より發し南に流るる海に注ぐもの

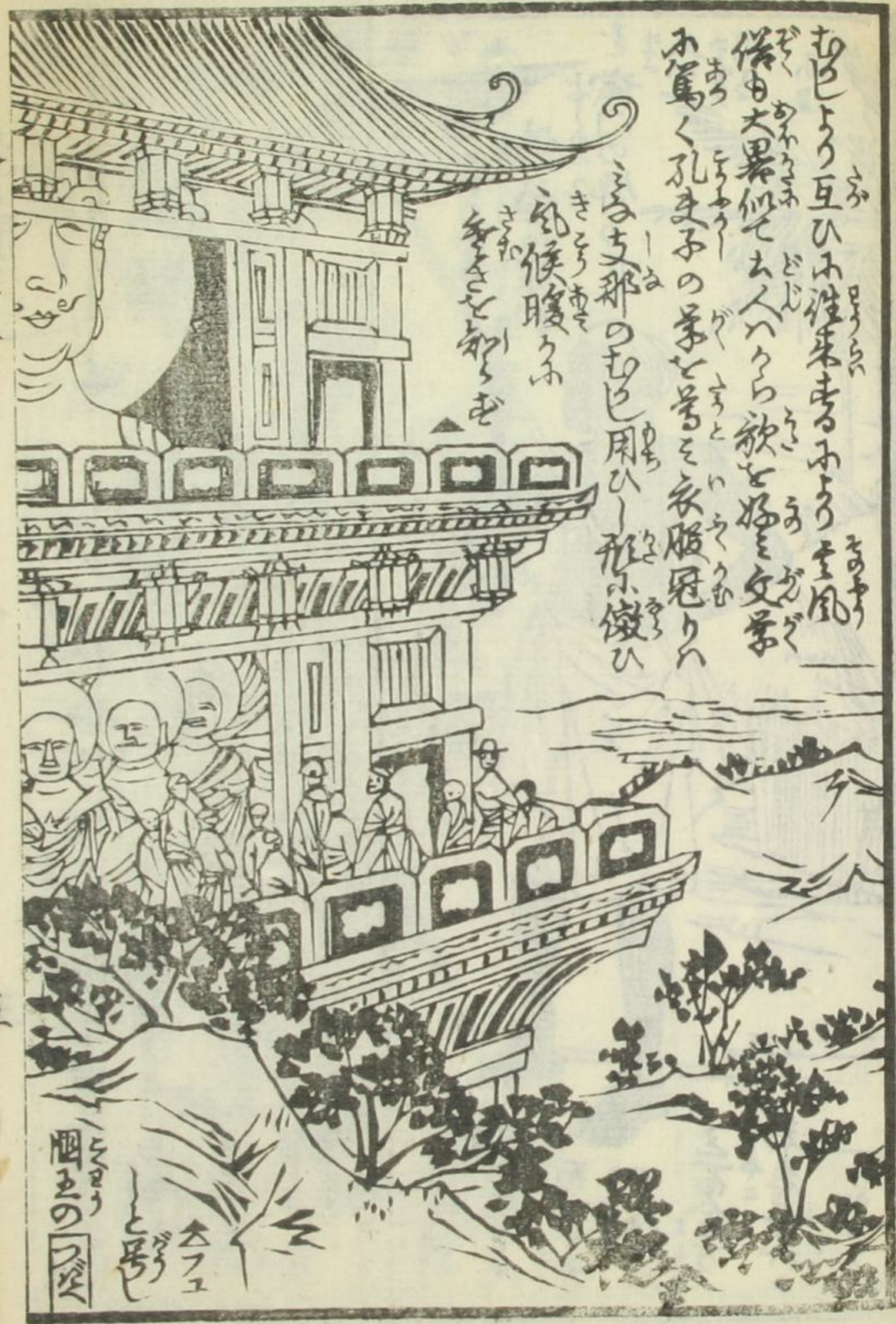
三



印度人男女風俗

各書三二





ちよとら互ひ小波来まるふよりそ風  
 儀も大異似て去人へら秋と好む文景  
 小篤く孔ま子の茶と号そ衣服冠りの  
 みる支那のむじ用ひ一形小儼ひ  
 候候腹くふ  
 手とを知らむ

煙土の  
 大フエ  
 と号し



号の春相つり此國支那と接と  
 米穀内植さとう後ぎん  
 草亦繁茂一ゴム良材本  
 の傾分あつ土地ゆさつ不  
 と号して号よ安南  
 とカンボチヤ  
 糸一南於

板小婦人の衣服もども  
 単へ物老成ひか  
 身老成者  
 あり重軽  
 有る

本  
 三

四







安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の  
 安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の

各道三十七

七



安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の  
 安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の

各道三十七

七

安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の  
 安南の  
 風俗の  
 支那人の  
 つき其の



西澤諸國との文憑も親しく  
 睦まじく西多国民の精用  
 北小通一と云わぬがランド  
 君の如く政羅巴英仏の  
 諸領を経て印度諸國と  
 經歴一之より地中海船と  
 海へ亞非利加海多エジプトの地と  
 一見せと印度地方と出帆一  
 月ありて亞非利加の大陸小船とを  
 と巨よりエジプトと漫遊するエジプト



其の西岸  
 及び小流  
 之を以て  
 名を如く  
 味も亦  
 てもく  
 也いふ  
 地は皆

へアフリカ大洲の東部の南  
 後一也地中海の對一西内地の方  
 リビア及びの沙漠ありて其の  
 の定まる地と知らむ東の紅海の淺  
 そみてスエスの地使れ誇り南の  
 列小接一南の九十里幅二百十  
 出入まとの其少船とエジプトと稱  
 南船とスビアと号く全國の幅は  
 十万余八百方里小船り人は七百  
 六方ふ千ありとの東船は山嶽  
 ありナイルの大流全ふきりて南  
 小流とて流ち小地中海小流



砂小沙石  
 のそのひら  
 野あり  
 うゆ氷  
 くる毎年  
 氷凍らむ  
 樹木稀あり  
 森や林の如く  
 くの肉あり相  
 とも此級小ナイルの水  
 利を以て地は更小用難  
 あり東西南北沙漠のあり



つぎあふ泉を湧き出せりてそのを傍りけり  
 耕さぬも亦とてまてまづの土地限り  
 多る米毛の短のそは中むじり上尊其領を  
 おぬしれと今も相違の形ちとてあまなり  
 され共トコロも毎年の有る

細り彼をいふて記せば  
 兵士もたてあはれをいふて世  
 界中のおはれは中と推しあへり  
 舞の地へ中を支那とらけ  
 且つたれとあつと知る人ら



格蘭氏傳倭文賞三編中之卷  
 大日本 假名垣魯文和解  
 都と霞と共ふ出より秋風を吹く白川の  
 関と縁し我國の往時法所へ絶る不殺聖の  
 道と愛と一家に隠し居る人ふ舎せ世美の  
 細道名所古流を尋ねふとて出る由と人ふ  
 尔し教目と終へぬり来りとせよ披露の事  
 名もくも知らずは後世不性の名ととりし風雅  
 社会の終始と終り性者人の固陋ある今を  
 似く回顧せば我海中孤立の世界知るまは  
 嘆きもも備ゆるりや文明のひろ地球と照し  
 我彼國よ統まはば彼も我國よ来るの

本館新聞

交易

親しく話し

グランド島米の本

諸國の支那支那の地方

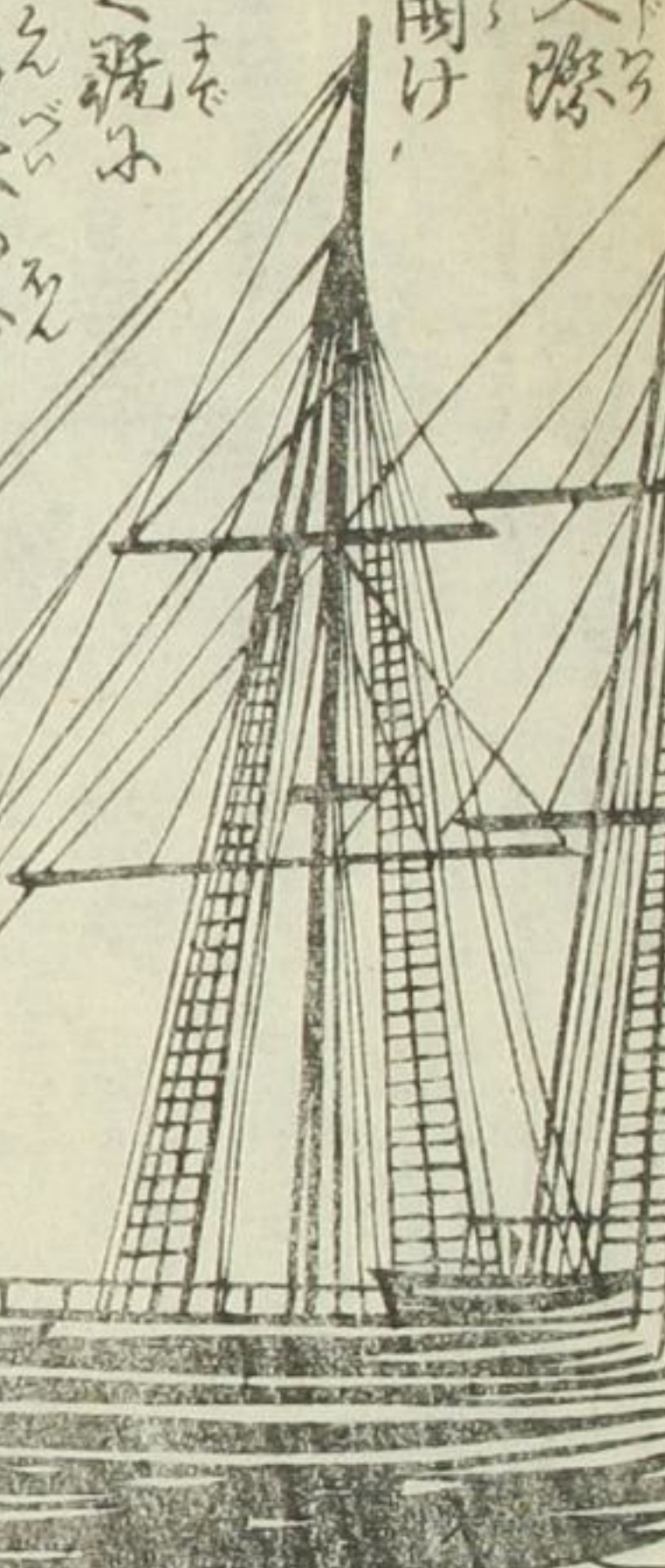
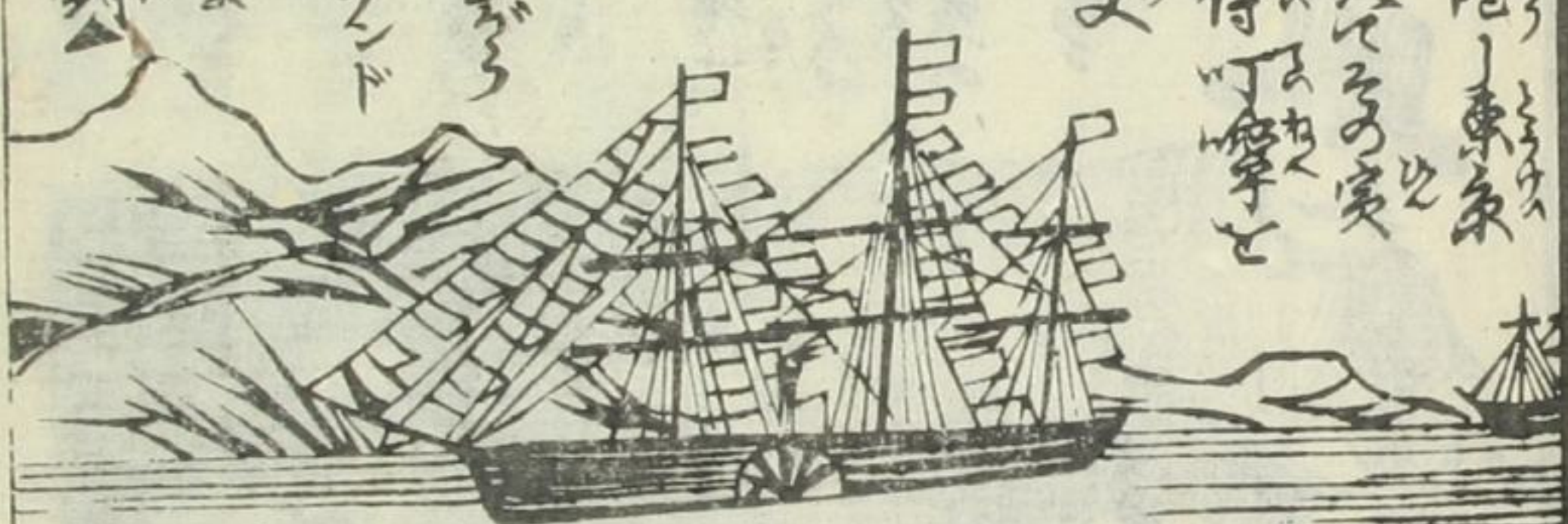
並細亞東方支那の地方

あつじめ巡廻

日本政府は彼民の

新橋の海止場(ステーション)に近入るの  
 佐我國の皇族小比呂の接待  
 格別ならん人民も亦政府の令に  
 今よ臨つてグランド島と接するの  
 原主と表するが通の船  
 西側より日本米國の諸島と接  
 甘桃灯と所毎小掛列ね大船の  
 船くまふまの船をむらりし  
 産神の祭祀不替舞う初てグランド  
 君来着ありしより先旅船と扱  
 芝濱の離宮中小設けられ接待

洛蘭三



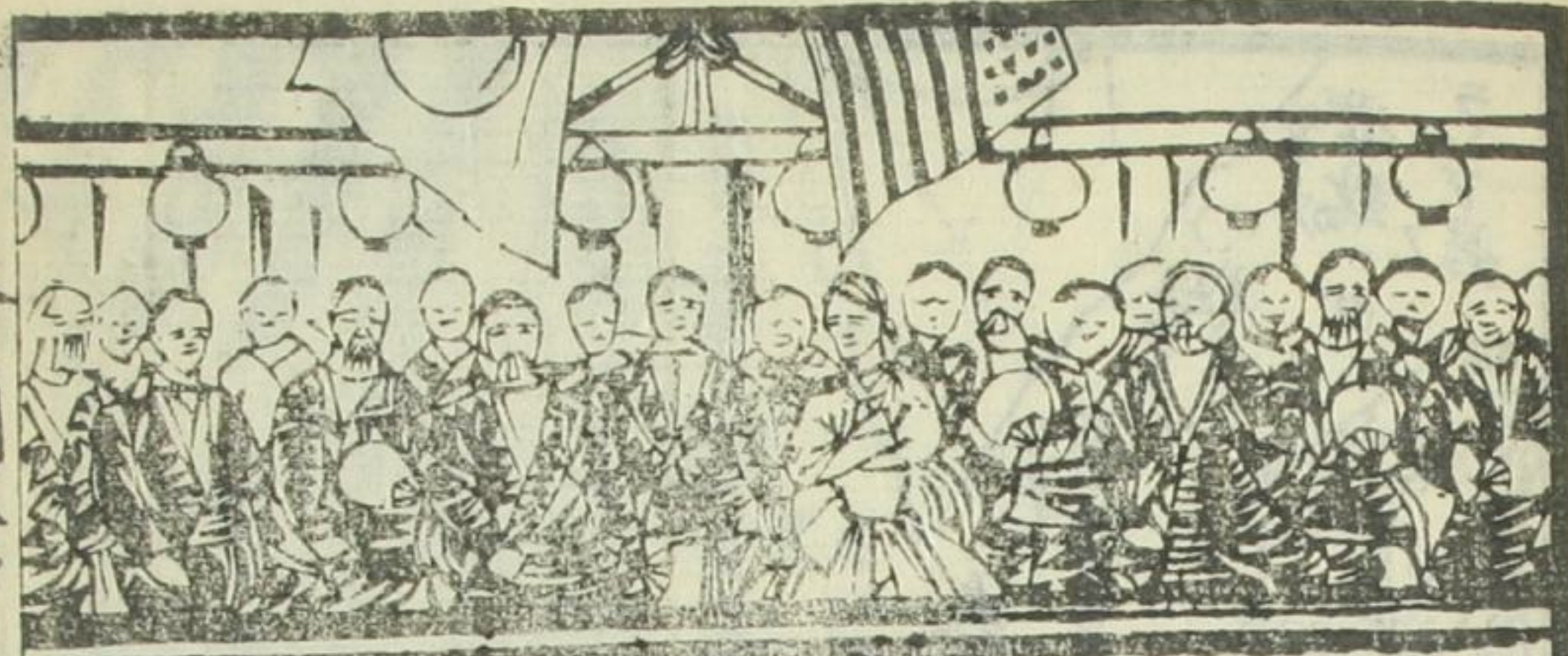
所とて要負と見と  
 周旋し諸官者  
 諸島工能製造  
 所博物館用  
 拓後の苑中  
 公園地の遊  
 後不

つき グランド君その子息は又も我  
 國國化の速いものと感服する様  
 皇太子も来朝し主上皇太子親しく  
 接しなすり親らるる御様と給さる  
 赤くも厚た御待遇と感入りし  
 同氏も皇太子の御一老我はあて  
 好る皇太子親睦を深くせしこと交  
 際上の美譽とありし茲小東系  
 大劇場新富座主守田劫海も  
 者なりし希いグランド君が御  
 のより迎へての延達雁は  
 何れと接待掛りや入す



今四日若我へ来統あるより ▲その御過  
 改訂也  
 一方あらま我々  
 一方も亦府民の  
 教務とて一日君と訪遇せし  
 とするゆへに一我れが役  
 立し新富座主半原  
 公俊も亦府の御優  
 待の技藝と程後  
 入直なりしこと  
 の形ひふあり  
 此も亦系  
 府舎の故吏等と  
 此も亦可とて

▲府知  
 府民接  
 訪掛りの  
 長者者務知  
 濃沃のぬ氏  
 わらもるる  
 此も亦可とて



東西上中下等の概姿の神意  
 土前入るの順  
 奉の儀に接訪  
 掛より祝寄せ  
 証券の番号み  
 記したる為状  
 の狂気の儀にその  
 脚色を復ける  
 りてお転てぎん  
 ド君が一世の栄  
 息と我むじの云

神意の  
 奉の儀に  
 掛より祝寄せ  
 証券の番号み  
 記したる為状  
 の狂気の儀にその  
 脚色を復ける  
 りてお転てぎん  
 ド君が一世の栄  
 息と我むじの云

神意の  
 奉の儀に  
 掛より祝寄せ  
 証券の番号み  
 記したる為状  
 の狂気の儀にその  
 脚色を復ける  
 りてお転てぎん  
 ド君が一世の栄  
 息と我むじの云



英園順来港  
 軍物海り小結  
 葉一門氏を八橋  
 左平儀家小  
 各ぞく言新  
 能あり先帝  
 関たの雨他り  
 小の御儀尾工  
 菊亭の儀右  
 の神小扮且布門  
 左園次ハ挿布  
 人丸坂東家  
 櫛ハ玉津信

英園順来港  
 軍物海り小結  
 葉一門氏を八橋  
 左平儀家小  
 各ぞく言新  
 能あり先帝  
 関たの雨他り  
 小の御儀尾工  
 菊亭の儀右  
 の神小扮且布門  
 左園次ハ挿布  
 人丸坂東家  
 櫛ハ玉津信







ぐおし生  
 生文ハ  
 志國オハ  
 ヨーヌのモント  
 ガンとムム

此家のあつた  
 作多小  
 住の男  
 子老小  
 濃の織  
 老教



一極の形を  
 布晒しを  
 先奉縣やうふ  
 幕とさう  
 年更舟軍池上の

一行田舎の輩を  
 大正  
 換一辺に  
 國志かの  
 里あるを  
 敷除地を  
 其が修治



ほぞ空しくゆるのまはりが作  
 へんふと并ふ之柄あるお中と池へら  
 大お被出末ゆりしうへ家  
 物うゆるとゆきて  
 此を被の考とて  
 友とをよゆ

作  
 生はあまの初る虚弱の  
 病はゆえられ  
 君へ源のゆえ  
 へんふと并ふ之柄あるお中と池へら  
 大お被出末ゆりしうへ家  
 物うゆるとゆきて  
 此を被の考とて  
 友とをよゆ



父の勤をまもりし世帯はかまひ  
 密とらる家(市川十市)  
 へ候の病はゆえられ  
 つね思純とあり他をまじり  
 作とゆきく毎日ゆふとゆ

父の勤をまもりし世帯はかまひ  
 密とらる家(市川十市)  
 へ候の病はゆえられ  
 つね思純とあり他をまじり  
 作とゆきく毎日ゆふとゆ



小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿

小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿  
 小倉の御殿  
 大宅の御殿

又右頁三

七



作  
 義  
 作  
 義  
 作  
 義  
 作  
 義

作  
 義  
 作  
 義  
 作  
 義  
 作  
 義

林蘭

六



敵討精二

此の親と押し止るる  
争が屋上の上実れ  
とて入帳し  
妹おのうが此  
月以暮ふ人の切多し  
平定同中後凱陣の後  
めて抵留せんと仰せおのうが  
恨ひ願ひを受へしをさし  
と厚み初申下は色も  
おのうと後初申下は色も  
実定同中後凱陣の後  
おのうも由緒下は色も

九郎  
と抱持し六義郎



敵討精二

あつては  
白旗をひくと  
おのうと親の  
おのうと親の  
おのうと親の

美家  
大宅

つきことしつて実なるもつて此の少由  
馬 早出

其と其のそ彼打鳴ま  
春のさふさをの味方  
と彼ら波の音馬家  
小雀ふ華徳人も一月  
出馬の糸後不随ひ後  
そふ加つ目かた出陣いさ  
ましく發巻つるとの次は夜家の  
伯父あつた陣代井上頼清を夜家の場  
頼清(市川お茶次)の書小眼晒まおも  
長家ぐらち唱まを教の書とて受けつてハハハ



●漬の種  
茂眼小舟青々  
さるお房若  
の企てを  
じ地まうて  
一之のふ  
法静光と  
あふ出馬  
年ふち  
うへ八幡  
を命表  
家(甲冑)  
まかつた

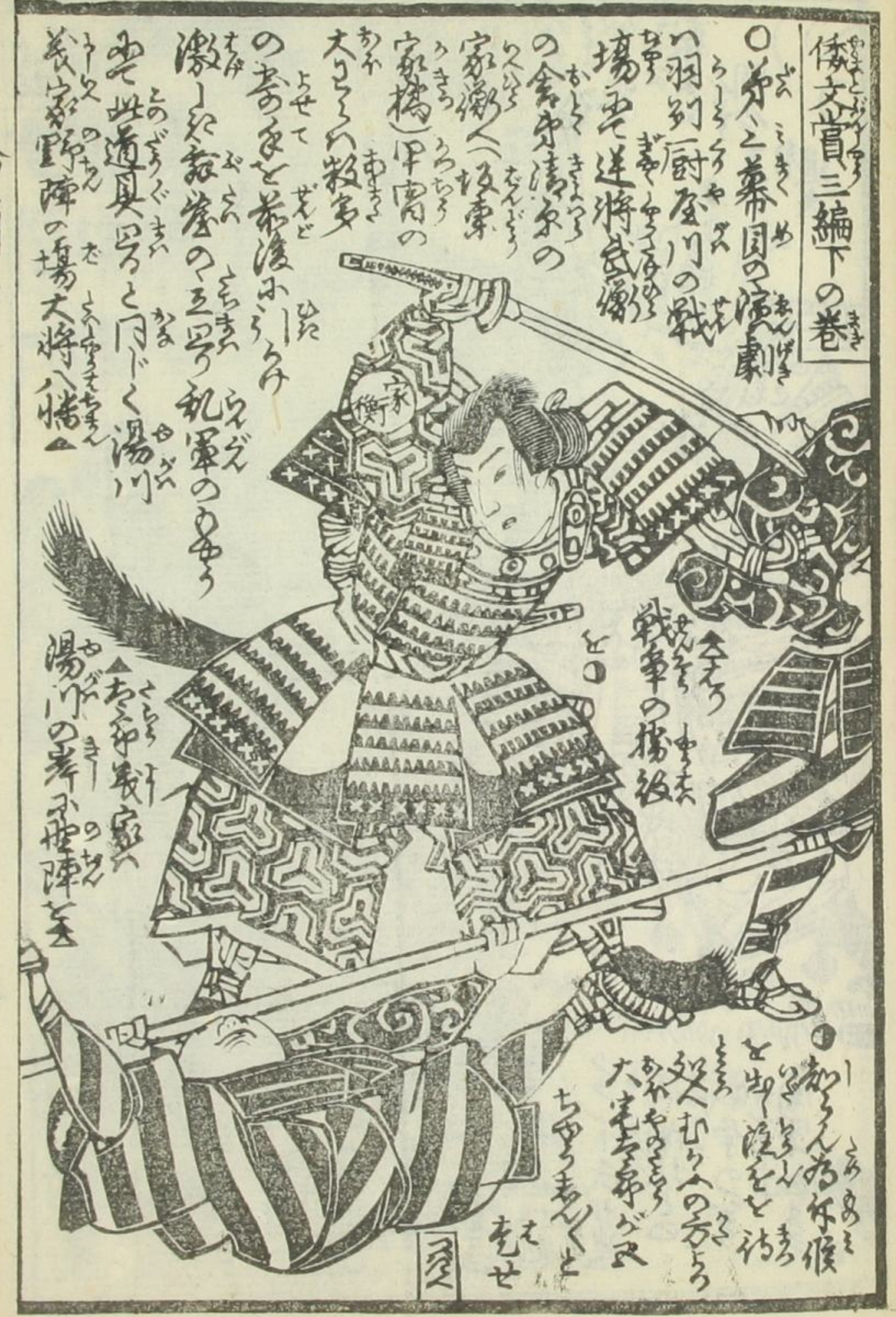
えん今半の世も教れ合じお教の事といふは  
厚之市川お茶次(市川お茶次)の書小眼晒まおも  
備を命表家の一揆とて多助とてあつた  
形勢と存るまうて頼清いさ  
けいけいば一揆の書小眼晒まおも  
抽てふ一揆の用とてあつた  
家が命表家をせ向つてあつた  
めん出馬の用意とてあつた  
其のちり体の御書  
(市川お茶次)の書小眼晒まおも  
清と押止しや陣代  
の出まはらひ及ぶは  
中夜が場の家が  
のふちんと地。



三雁  
給ふまは  
こんどの奉  
大義と過  
まう一揆  
の書小眼晒まおも  
足先及運  
の波あど  
ハハハ



徳川三編下の巻



徳川三編下

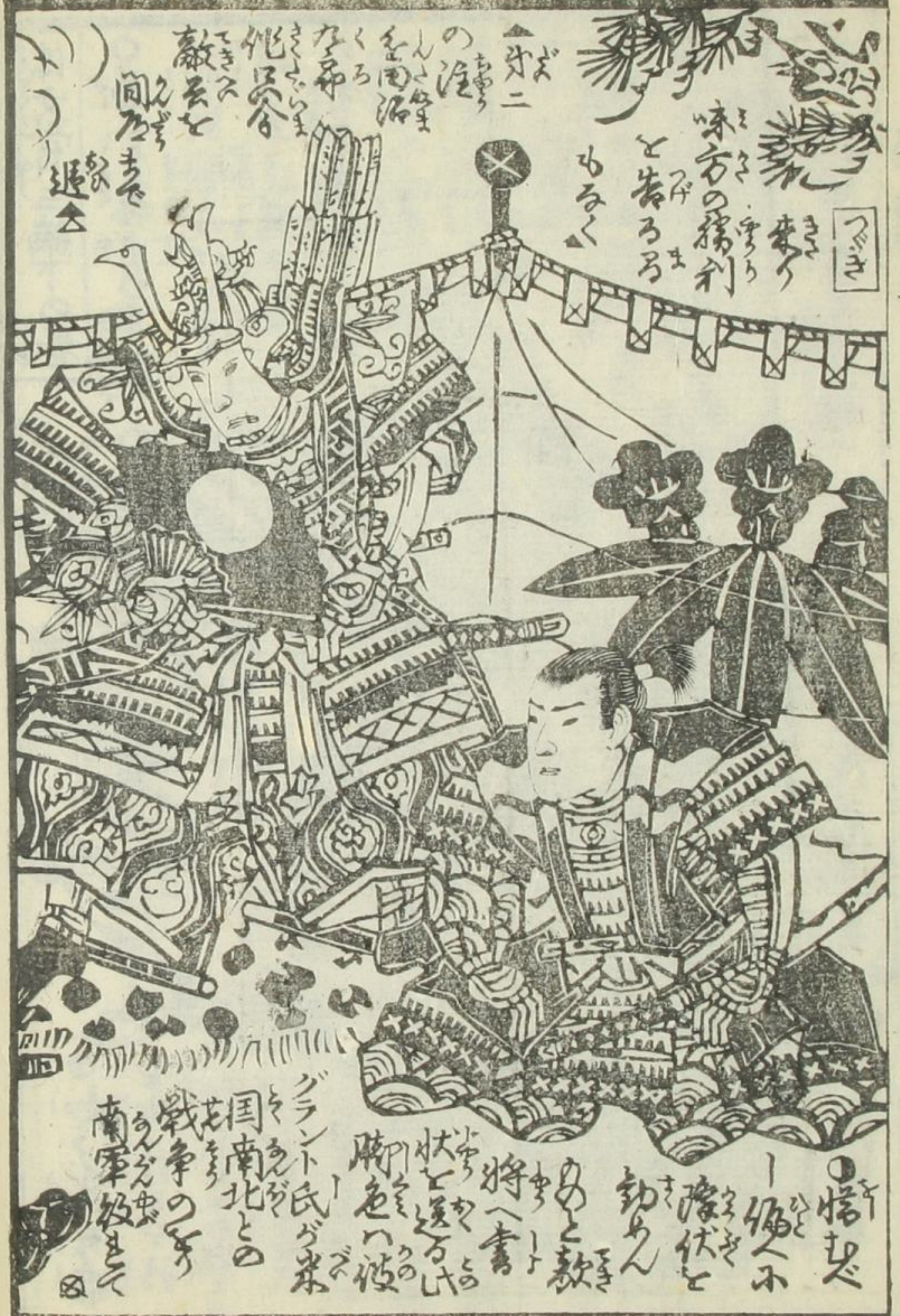


あつちの海  
者付死さまるい

退きあめ  
攻まふ渠  
狼狽大方  
戦場の系  
物方ふ天  
悦喜の敵  
あつちの海  
者付死さまるい

敵將  
送る  
効め

南軍  
北軍  
南軍  
北軍



敵軍  
間  
退

味方の  
と告る  
もろく

情  
一  
敵  
脚  
南軍  
北軍

李氏と西原を  
あたる勲功と稱せ

者

あつとぞ

○武衛定房の死

城の場清東の

武衛



出まきと武衛へのあつとぞ  
と村と雨を懐かす

その文面が

長谷川

知ると併ら

ふ候と勝

仗と勤り

仁義のと

を武ひ

足身此小

於ん答

く及運の能

と悔ひ長

（宗十郎）の味方  
進く紋軍の極子と

あまき緒士と集めて軍

とらじ程もある世とまお

令弟家瀬へ礼軍おま

働ら死を極傷と負て

味方へ執り少あ

付死

みせお 冷然たる是

武運よるくは

一くもあぐく付死の

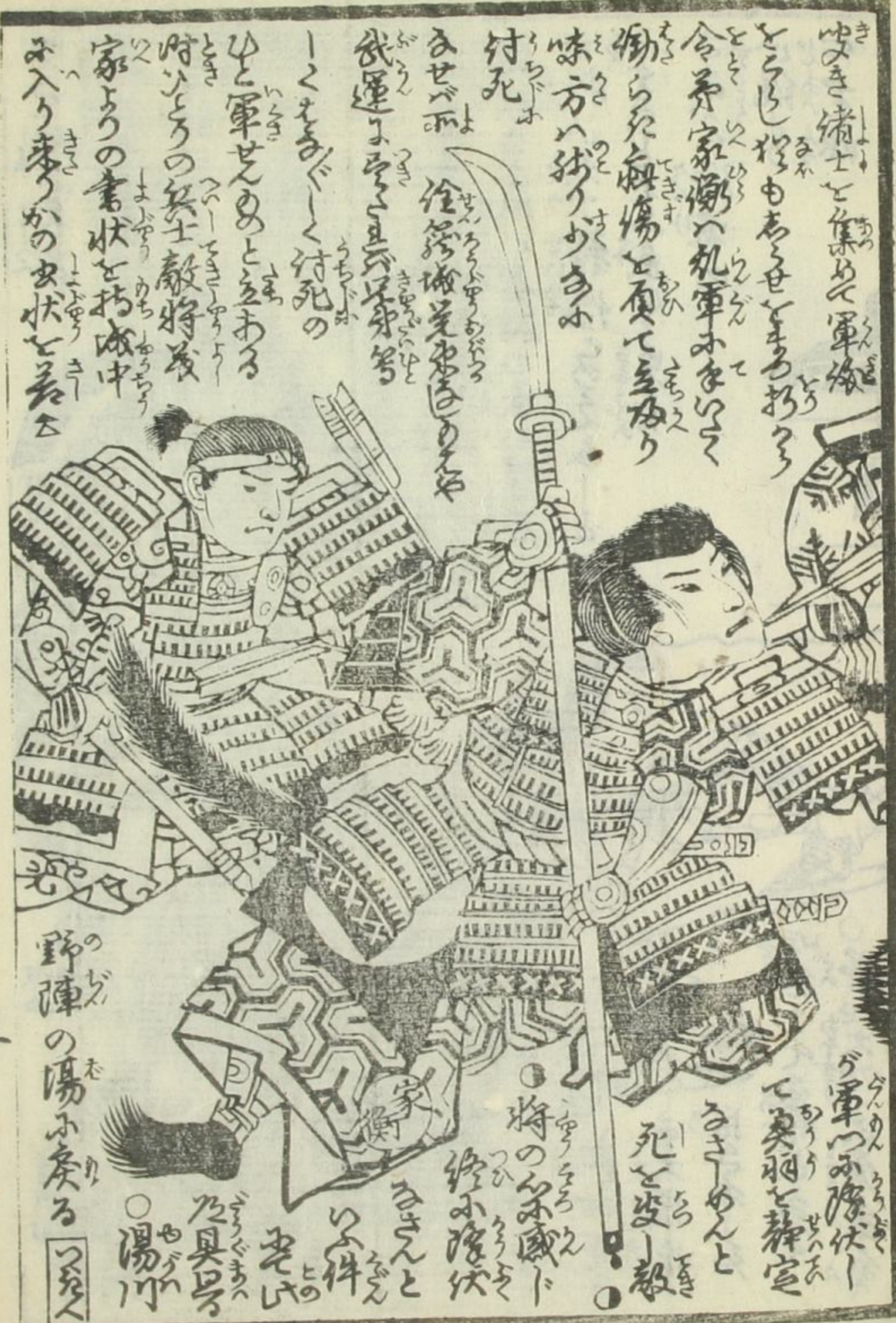
ひと軍見のものと

討つとろの兵士敵將

家より書状と持成中

ふ入り来りか

各七則三下



軍への勝仗

て奥羽と静定

さきとめん

死と交一

將の

終小

の件

老

乃具

湯川

野陣の場

つ

三







各上朝三下



のありの初  
 グランド君の  
 ありの初  
 公團迎舞を  
 の古語智見  
 後方のその  
 横濱田舎所  
 の後宴  
 花柳毒補の家  
 遊と足終らう同年  
 九月首と  
 るふ

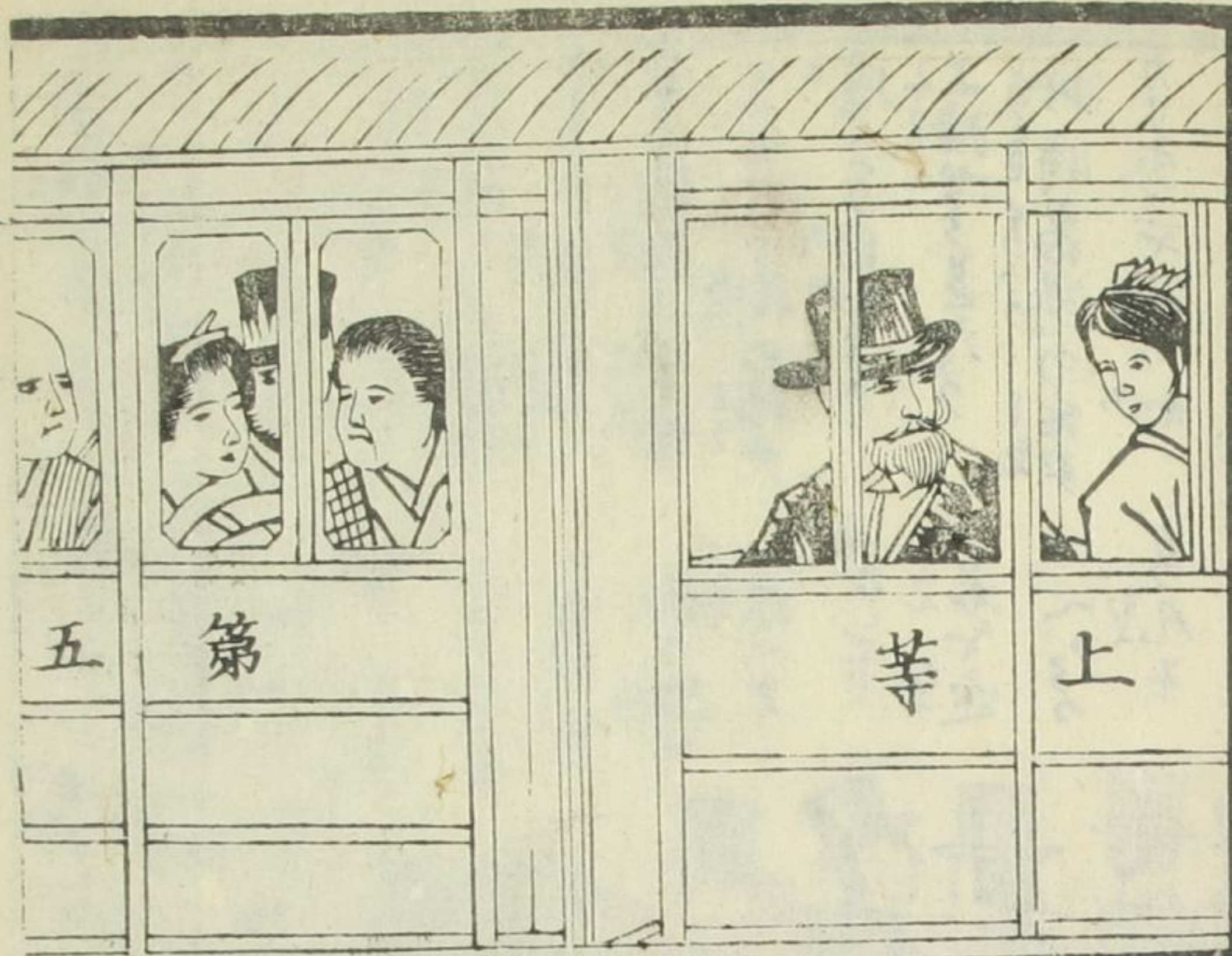
宮内の諸官  
 負五箇の  
 米國公  
 使領事  
 官横濱より出  
 途ハ  
 遠ハ



つきグランド君の外の外  
 舞民接待委員長福地  
 濃沢の氏氏小浜く附  
 さと又富産主者田  
 幼少人の探  
 紙の幕一張と  
 賜らしたる  
 実分今迄の  
 遊覧の日本劇場  
 創業以来先代  
 未開ののふよ  
 新富産の栄栄を  
 後子傳ふに  
 接待委員

東系  
 とあまらうに横濱  
 報うふ小この我外務  
 御を下り内務

及上南



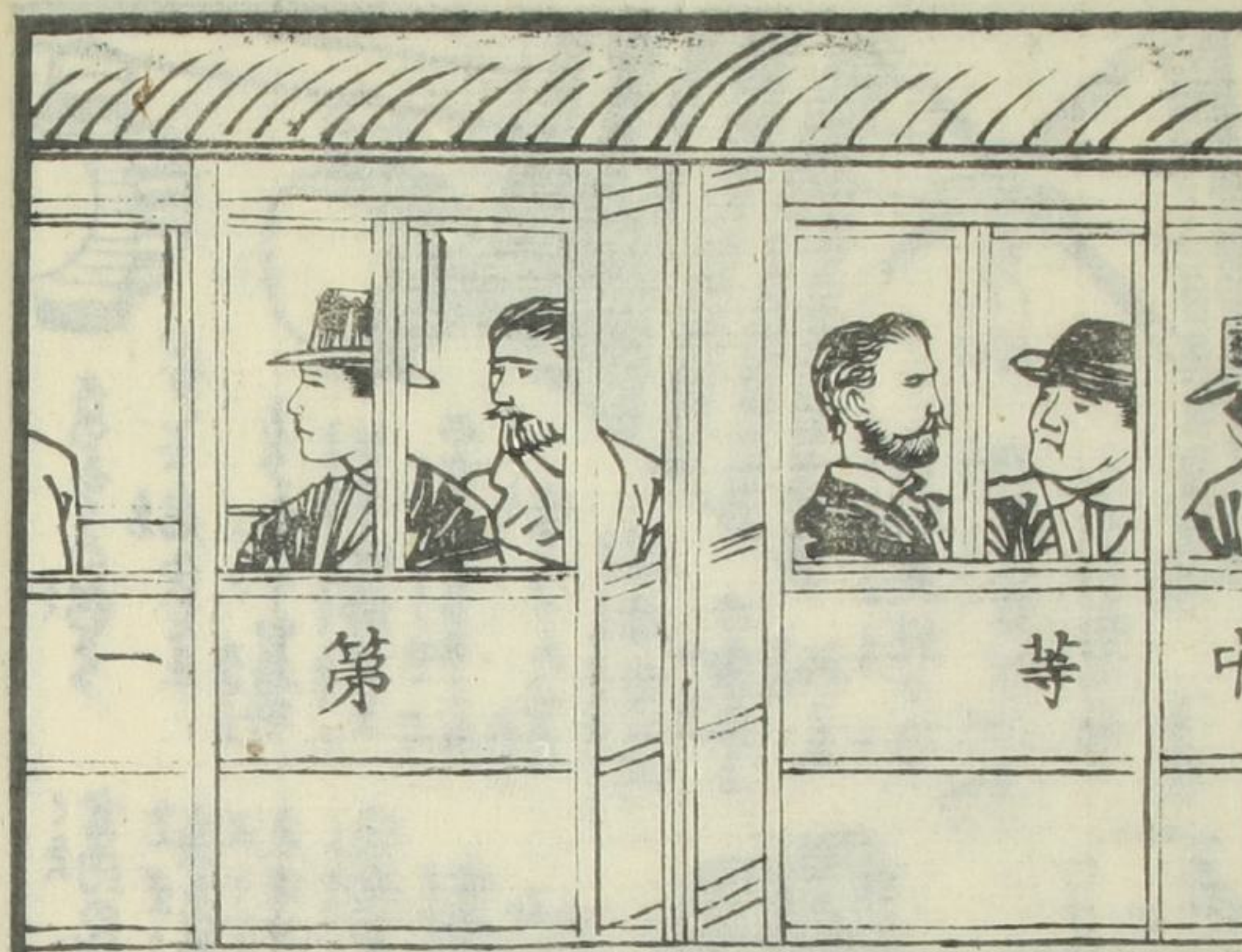
五 第  
 上 等  
 一 第  
 中 等

平海の風波もよく  
 フランシスコよ入港  
 シチイヲフリーウキヨ  
 ト舞ハ九月二十日ハサシ  
 組まるとる米國郵船  
 グランド第一族の  
 小傳へたりさる程  
 君が徳屋後の美談  
 祝砲朝野ふむく  
 込もて平海と海國の  
 島日米國郵船ふさう  
 の人負流車ふ満ち  
 つき後港まで送る

平海の風波もよく  
 フランシスコよ入港  
 シチイヲフリーウキヨ  
 ト舞ハ九月二十日ハサシ  
 組まるとる米國郵船  
 グランド第一族の  
 小傳へたりさる程  
 君が徳屋後の美談  
 祝砲朝野ふむく  
 込もて平海と海國の  
 島日米國郵船ふさう  
 の人負流車ふ満ち  
 つき後港まで送る

ト

和蘭



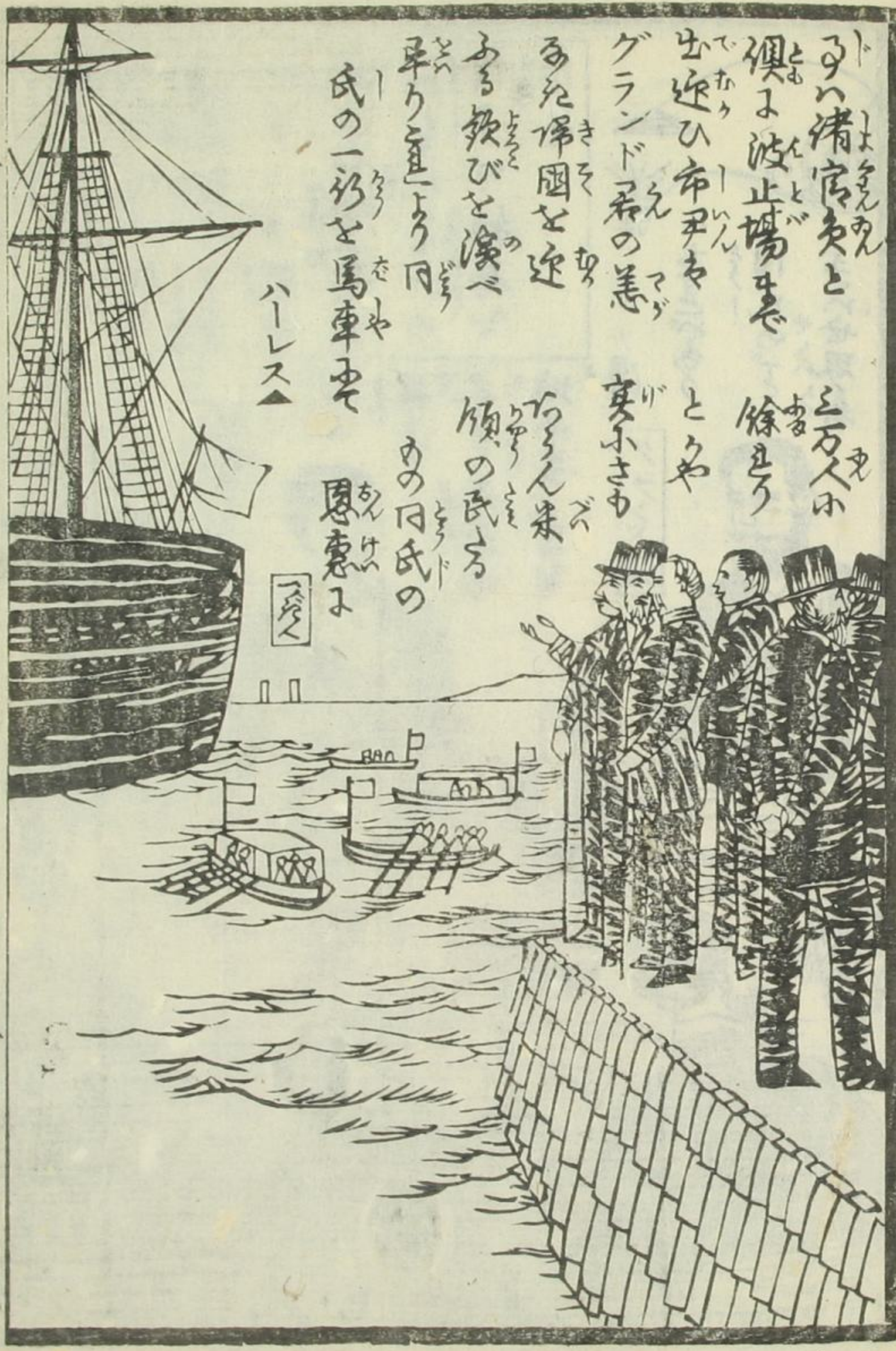
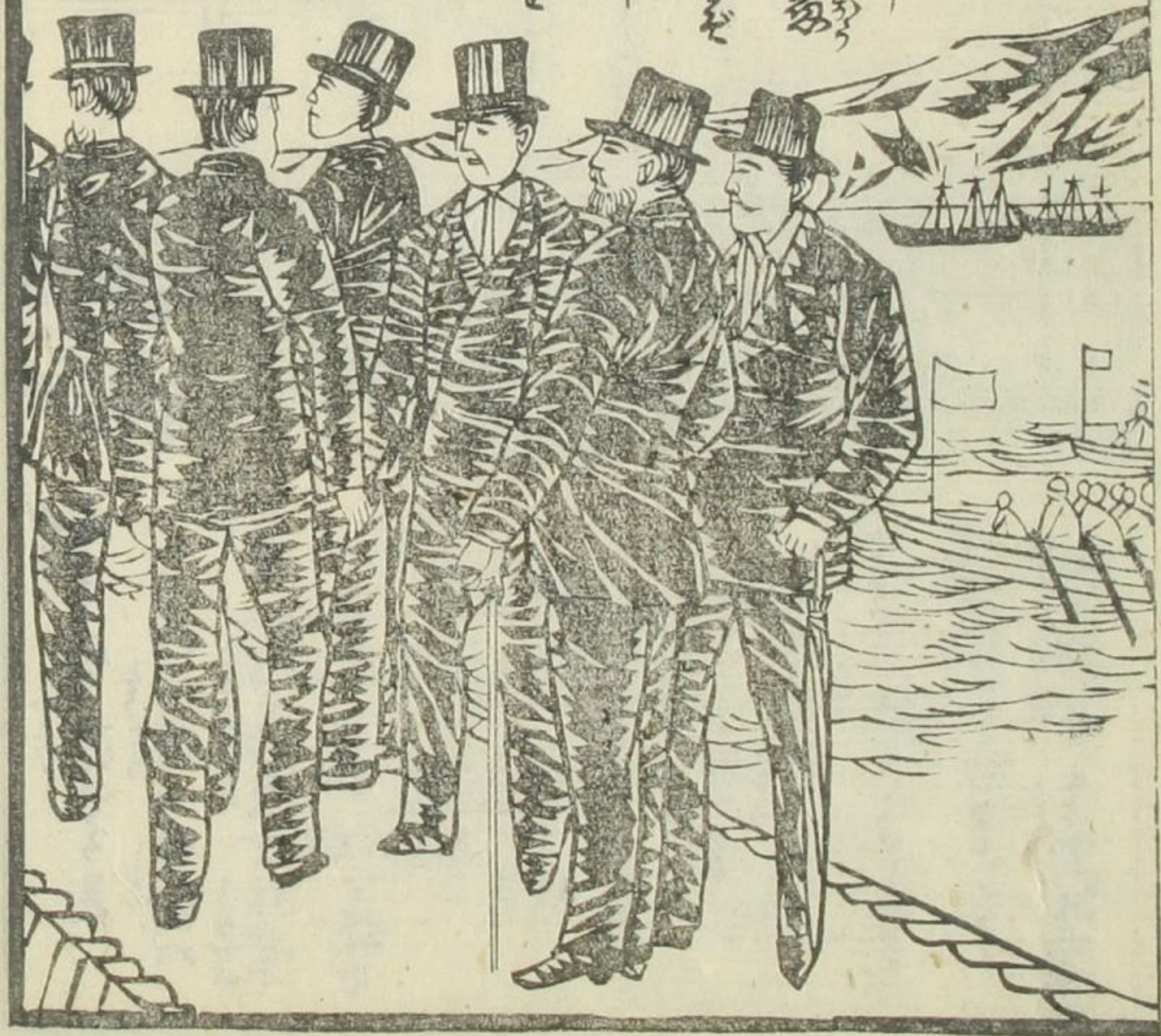
一 第  
 中 等

平海の風波もよく  
 フランシスコよ入港  
 シチイヲフリーウキヨ  
 ト舞ハ九月二十日ハサシ  
 組まるとる米國郵船  
 グランド第一族の  
 小傳へたりさる程  
 君が徳屋後の美談  
 祝砲朝野ふむく  
 込もて平海と海國の  
 島日米國郵船ふさう  
 の人負流車ふ満ち  
 つき後港まで送る

六

フリスコルデンゲ  
 工と通航七サン  
 フランシスコ入ると  
 砲と板ツと救護  
 グランド君の傍中  
 マルケット街の波  
 場より目めく  
 上陸せしむたり  
 此時高港の市尹  
 カリホルヤ抄の知

ホテル  
 (大旅館)  
 小橋より  
 幸く答へ  
 この日市  
 民の船と  
 浮べく  
 グランド  
 君を途  
 へたる  
 めんそ



トの諸官と  
 俱に波止場まで  
 出迎ひ市尹も  
 グランド君の恙  
 るに帰國を途  
 みる候びと濱へ  
 早り直より同  
 氏の一行を馬車中

三万人小  
 餘り  
 と名  
 実小さむ  
 ちん米  
 傾の民方  
 の日氏の  
 恩恵も

ハールス

ハールス



桑港のハートレス  
 大旅店よ於て  
 諸米國の官貢  
 グランド君の  
 親子と饗應の  
 圖を以てその  
 冊子の結局を  
 示す

同夫人  
 日氏今年二十  
 八歳健壯者  
 年ふ和む力  
 今亦於て携まんと

徳聖地邦の  
 彼及の人  
 英雄に  
 同夫人  
 酒中不現今  
 その人あり  
 をこそ



桑港のハートレス  
 大旅店よ於て  
 諸米國の官貢  
 グランド君の  
 親子と饗應の  
 圖を以てその  
 冊子の結局を  
 示す

同氏令息  
 依る  
 久く春平の  
 地み安んずるを  
 グランド君  
 日氏のど  
 きいせ思ふ

格蘭氏傳倭文賞

三編 讀切

綾重夜紋廻春秋



士 君子名

と務まるゆ

可るんくと

世一週のまを果して

静くおぼろおぼろの後

又天命と深むるん

実小月かきた

市岡正一篇

本朝税則全冊



假名垣魯文和解 梅堂國政畫

官 朝鮮 牛肉丸

名法

官 天泰丸

名法

笑 地本問席

錦繪

七月廿三日

假名垣魯文... 梅堂國政畫

假名垣魯文... 梅堂國政畫

